

英語の不得意な大学生のDecodingの傾向とその指導 への一考察

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2022-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 兼重, 昇, 築道, 和明, 辰巳, 明子, 濱崎, 太賀 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4811

英語の不得意な大学生の Decoding の傾向とその指導への一考察

児童教育学部 児童教育学科 兼重 昇
 広島大学 築道 和明
 長崎外国語大学 辰己 明子
 鳥取県若桜町立若桜学園 濱崎 太賀

要旨：本研究は、英語能力の大切な要素である文字の音声化において困難を感じている大学生を対象に、その音声化の傾向を記述するとともに、指導により実際の音声化・音読の力が向上するかを試みた実践的研究である。調査協力者は、自己診断で英語を得意でないと回答した大学生 21 人（有効データ 17 人）で、事前テストとして未知語を音声化してもらった。その結果、協力者の音声化の傾向として、「ローマ字読み」「既知語活用」「類似語活用」の特徴があることが明らかになった。その後、この結果をもとに、綴字への注意を喚起しながら、フォニックスルールに基づいた指導及び行い、その効果検証を行った。結果として、技能面では肯定的な効果は得られなかったものの、知識・情意面では、未知語と出会った際に否定的になるのではなく、意識的に注意をして読もうとするなどの効果は得られた。

キーワード：decoding、音読、学習困難、リメディアル教育

1. 研究の背景と目的

2020 年度より、小学校における「外国語科」の導入がされ、外国語教育の早期化が進みつつある。その中で様々な実践が行われているが、関連する学会等を外観すると小学校外国語教育における文字と音の関係についての研究・指導が積極的に行われているようである。また、近年、英語授業があまり得意でないという大学生も多く見られ、その原因についての研究も多く見られる（辰己 2021, 梅木 2021）。

辰己（2021:37）では、マインドセットという概念を用いて大学生の英語学習に対する意識に関して、次のような実態を明らかにしている。

- ① 学生が英語を苦手と感じ始めるのは、小学校で習得したローマ字知識が援用できない中学校英語を学び始めたときに感じ始める。
- ② 学生は英語授業で使用される文法用語の意味がわからず、機械翻訳があるため、英文和訳を用いた指導に意義を見いだせない。
- ③ 学生は、自身に対する教員の否定的な見方を感じている。
- ④ 日常生活で英語を使う機会がないため、学生は

大学で英語を学ぶ必要性を感じておらず、英語を勉強しても「できない」と思っている。

特に①の指摘にあるように、大学生の英語授業に対する苦手意識の一つとして、文字指導が関連しているのではないかということがうかがえる。これは、著者らが経験的に感じている「音読のできない大学生」という実態にも通じるものがある。また、『中高の英語指導に関する実態調査』（ベネッセ教育総合研究所 2016）では、教員が感じる中高生の英語学習の困難点として、「文字から音に変換すること」とあるように、リテラシーを考える上での重要なプロセス段階である「Decoding の現状調査」と「処遇のあり方」に着目して指導することは、単に情意面での支援だけでなく、認知面から苦手をサポートしていく上で重要であると考えられる。

そこで本研究では、この「文字の音声化（decoding）」について、英語があまり得意でないと述べている大学生がどのようにして音声化を行なっているかの現状を調査するとともに、それが指導によって変容するものかについて調査する。

2. 先行研究

2.1 Decoding とは

卯城 (2013:10) では、「解読 (ここでいう Decoding) とは、音と文字との関係を理解し、両者を結び付けることができる能力のことで、文字とのつながりに関する知識や、スペリングを見て正確に発音できる力などを含む」としている。

そして、この Decoding が「リテラシー発達」の全体的概念図との位置付けを示したものが図1「リテラシー発達の概念図」(Morrison (2009)) である。このうち、点線で示した“phonological awareness”, “phonics”, “print awareness”が相互に結びつきながら、“vocabulary” (語彙) につながっている。改めて、リテラシーの発達として、「語彙をやる」ためにも、「音と文字の関係」を理解しておくことが重要であることが再認識される。

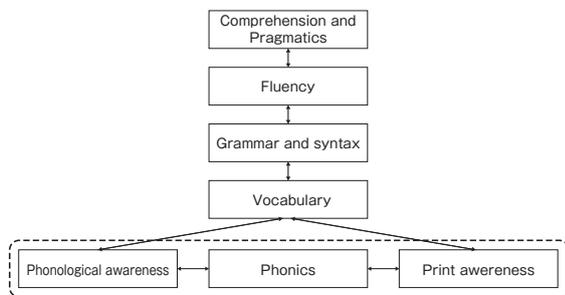


図1 「リテラシー発達の概念図」(Morrison, 2009 より加筆: 点線枠著者)

2.2 日本における文字指導の現状

それでは、このリテラシーのために重要な decoding の指導について、日本ではどのような指導がされてきただろうか。村上 (2015) は、日本の読み書き指導を語る中で、この点について次のように述べている。

- 日本では、アルファベットの文字認識の後にはすぐに単語を文脈の中で学んでいく指導が行われていることから、その背景となる指導理論はホール・ランゲッジに近いように思われる。しかし、デコーディング指導がほとんど行われていないことから、完全にホール・ランゲッジ理論を実践しているとも言い切れない。
- 日本の英語教育における読み書き指導は、単語を構成する文字の音や対応規則の指導が抜け落ちたような状態にあると言える。

ホール・ランゲッジやフォニックス指導という文字指導の詳細及びこの両者に関する論争については、長く行われてきた点について (Heilman (1981)、卯城ら (2013

等他多数)、本稿においては、紙面上割愛するが、日本における「音と文字の指導」がどちらともつかない中途な状況であることは想像に難くない。もちろん、大規模な実態調査に基づいて行われたものではないが、先述のベネッセ教育総合研究所 (2016) の調査によっても、教員自身が「音と文字の指導」に課題を感じていることから、本調査研究により、現在の指導の成果と課題が明らかになるものと考えている。

3. 研究課題

本調査研究では、大学生の英語学習への課題と予想される「音と文字の関係」について、実態調査を行い、その認知的傾向を探り、その課題が指導によりどのような変化をもたらすのかを「認知面」「情意面」から明らかにするために、次の二つの研究課題を設定した。

- ① 英語学習者が文字情報を音声化の傾向はどのようなものか、またどのような規則に基づいているか。
- ② その傾向から考えられる指導を試行し、認知面、情意面ではどのような影響があるか。

4. 調査

4.1 調査協力者

英語を不得意と回答した大学生 21 人を対象として行った。このうち参加状況と録音における不具合により有効データ 17 人分を扱った。

4.2 調査材料

事前テストと事後テストを行う際に Heilman (1981) の phonics rule を参考にし、ルールに則ったものとそうでないものを混在させ、英検準一級相当のレベルの英単語からそれぞれ 15 単語ずつ選択した。

表1 テストに使用した単語リスト

Tests	Words used in the test
Pre-test	“nuisance”, “dismay”, “profile”, “sphere”, “theory”, “refloat”, “reassure”, “fetch”, “smudge”, “conceal”, “intense”, “provisional”, “adverse”, “feasible”, “permanent”
Post-test	“mainstream”, “doom”, “slaughter”, “preference”, “faith”, “grave”, “compile”, “stumble”, “gleam”, “aptitude”, “ceaseless”, “bountiful”, “irate”, and “refugee”

単語選択に当たっては、「無意味語」を利用することも考えられたが、実践は授業の一環で行うもので、単なる調査目的のためのものは相応しくないという判断で、今後の学習に役立つものを選択した。

4.3 調査手順

調査手順は以下の通りである。

Step1：事前テスト：調査協力者に未知語相当の単語を発音してもらい、それをICレコーダーに録音する。録音したデータを分析し、発音の誤りから実験参加者の decoding 傾向を考察する。

Step2：インタビュー1：分析した結果を確認するために事前テストに関するインタビュー調査を行う。

Step3：指導方法の検討及び指導：得られた decoding の傾向から指導方法を検討し、その指導を行う。

Step4：事後テスト：事前テストと同様の形式の事後テストを行い、decoding が変化したか（認知面）を調査する。

Step5：事後アンケート及びインタビュー2：decoding の仕方の変化や指導に関する事後アンケート（認知面・情意面）を行う。

5. 結果

5.1 事前テストの結果

テスト結果は、全て録音し個々の発音のうち、特に誤りに着目し、どのように音声化しているかを記述し類型を作成した。その結果、調査協力者の decoding の傾向は次のように大きく3つのタイプに分けられることがわかった。

タイプ1：ローマ字読み

タイプ2：既知語活用読み

タイプ3：類似語活用読み

以下それぞれのタイプについて、簡単に具体例をもとに描写する。

「Type1：ローマ字読み」

ローマ字の規則に従って単語を発音する傾向で、特に二重母音の部分に使用する傾向が見られた。

例) nuisance → /nui/
reassure → /rea/
feasible → /fea/

「既知語活用読み」

自分の知っている単語の発音を対象の単語の発音の一部に適用させながら読む傾向である。

例) theory → /ðə/
冠詞の the の発音を適用させながら発音

「類似語活用読み」

「既知語活用読み」と重なる場合もあるが、自分の知っている単語の発音を対象の単語の発音にそのまま適用させて誤って読むものである。

例) adverse → “advance”
sphere → “space”, “space”

「その他」

この他にも、さまざまな誤りの decoding が見られたが、いくつかのみ例を挙げる。

・単語内のアルファベットの語順を変えて発音

例) nuisance → “nuisance”

・一部を読まない

例) permanent → “perment”

表2 誤りの decoding の分類

	タイプ1	タイプ2	タイプ3
nuisance	nui- /ui/		
dismay	dɪs- /ai/	“many”	
profile	-file /fil//fli/		
sphere	Sphe- /fe/	“here”	
theory		/ ðeo/	
refloat	re- /re/		
reassure	reassure / rea//sure/		
fetch			
smudge	/sumuduge/		“smoothie”
conceal	-ceal /seal/		
provisional		-sion /sio/	
adverse			“advance” “advice” “addition”
feasible	fea- /fea/		

下線部の音声化の様子を、//は発音、“ ”は単語で表している。

表3は各タイプの使用者をまとめたものである。調査協力者が15の未知語に対して、一度でも各タイプの decoding をしていると判断した場合、使用者としてカウントしている。多くの協力者がローマ字の読み方で単

語を発音し誤る傾向があることがわかる。これは、Kawasaki (2009) の指摘とも同じである。特に日本人英語学習者に特徴的な傾向として、ローマ字読みをすることを優先させることがうかがえる。

表3 事前テストにおける各タイプの使用者

Decoding のタイプ	ローマ字読み	既知語活用読み	類似語活用読み
人数 (n=17)	16	8	10

表4は、Decoding のタイプの組み合わせとその人数を示したものである。本調査協力者の多くが、ローマ字読みに執着しているグループと、この3つのタイプを全て使っているグループが多いことがわかる。特に、ローマ字読みに執着していると思われるグループに対する何らかの指導が必要であることが考えられる。

表4 事前テスト各タイプの組み合わせと使用者

Decoding の組み合わせ	A	B	C	D
人数 (n=17)	7	2	1	7

A：ローマ字読みのみ

B：ローマ字読み+既知語活用読み

C：ローマ字読み+類似語活用読み

D：ローマ字読み+既知語活用読み+類似語活用読み

5.2 インタビュー1の結果

事前テストから推察された三つのタイプの decoding 傾向を確かめるために、4人の実験協力者に半構造化面接法によるインタビュー調査を行った。インタビューに協力してくれた4人は、比較的ローマ字読みを多用していた協力者であり、各単語を一つずつ振り返り、どのように発音し、どのような規則を用いて発音したかについて質問をした。

インタビューから、調査協力者が文字を音声化する際に、大まかに次のようなプロセスをとると回答を得た。

- 綴りを前からみて音声化する。その際もローマ字読みに頼ることが多い。音と文字の関係について、具体的にたずねたところ、いわゆる phonics rule を知らない様子が見られる。
- 単語の中に知っている単語、綴り字がないかを探すメタ的には、この手法を知っているようだが、既知語の数が十分でないため、実際に活用できる場面が少な

いようである。

- これらに加えて、既知語活用・類似語活用をすることがあるが、その際に綴り字に対する注意が散漫であることが多くある。

こうした結果は、量的に確認できた decoding のタイプを裏付けるものであり、本調査協力者の decoding の傾向は次のようにまとめられる。

英語の不得意な大学生が、未知語の綴り字に遭遇した場合、その decoding には3つのタイプ（タイプ1:ローマ字読み、タイプ2:既知語活用読み、タイプ3:類似語活用読み）があり、比較的タイプ1を多用している。特に、その傾向は二重母音で見られる。また、単語の綴り字に対する注意が薄いものの自分の知っている語や接頭辞などを探す方略は持っている。ただし、文字と音との対応規則に対する知識が十分でない。

5.3 指導

上で得られた調査協力者の decoding の傾向から、「綴りに対する意識を高める必要性」「音と文字の認識の能力と意識を高める必要性」の二つの要素を取りあげ、どのような指導が効果的かについて検討した。

小崎 (2011) は phonics に基づいた指導により、綴りへの注意に影響を与え、文字認識と音韻認識に良い影響を与えると指摘しており、今回はこれに倣って明示的に音と文字の指導をすることとした。特に、事前テストにおいてローマ字読みを多用して誤った発音（特に二重母音の部分）している協力者が多く見られたため、母音の発音について phonics rule をもとにして指導を行った。

指導は週に1回の授業で2週にわたって行った。指導方法は、教師が文字に注意を向けさせることから始め、その発音について、明示的に説明し、それらを含む英単語を教師に続いて発音するというものである。また発音した音声はデータとして配付し、いつでもアクセスできるように環境を整えた。

活動に扱った語彙は、いわゆる小学生などの初期学習者用のものでは、大学生のモチベーションの減退の恐れを考え、事前テストと同様に授業で扱う単語をできるだけ活用した。

5.4 事後テスト

指導の結果検証のため、事後テストでは事前テストと

同様の手続きで行なった。表5、6はそれぞれ事前・事後テストの各タイプ及び、組み合わせに対する使用者を示したものである。

表5 事前・事後テストにおける各タイプの使用者

Decoding のタイプ	ローマ字読み	既知語活用読み	類似語活用読み
事前テスト (n=17)	16	8	10
事後テスト (n=17)	16	3	11

表6 事前・事後テストの結果：各方法の組み合わせと使用者

Decoding の組み合わせ	A	B	C	D
事前テスト (n=17)	7	2	1	7
事後テスト (n=17)	4	1	9	2

※事後テストにおいて1名は誤りなし。

A：ローマ字読みのみ

B：ローマ字読み+既知語活用読み

C：ローマ字読み+類似語活用読み

D：ローマ字読み+既知語活用読み+類似語活用読み

表5より、事前・事後テストを比較した際、依然として未知語と出会った際に「ローマ字読み」を利用する傾向に変化はない。ほぼ全ての調査協力者がその特徴を持っている。これは今回の指導による phonics ルールの明示的指導が十分ではなかった頃によるかもしれない。一方で、既知語活用の数が若干減少していることがわかる。これは綴り字に注意を払う指導により、与えられた未知語が既知語でないという認識がされ、それを利用することができなくなったことによると推察される。この傾向は、表6を見ても3つのタイプを利用するDが減少し、Cの「ローマ字読み+類似語活用読み」が増加したことも関連がある。

5.5 事後アンケート及びインタビュー

指導を通して調査協力者の decoding に対する認識の変化、また指導内容そのものに対する意見を事後アンケート及びインタビューで尋ねた。

結果として、16人の協力者が「綴りを見て発音を想像できるかどうか」「知らない単語を見た際にどうにかして読もうとするかどうか」や「指導を通して綴りに注意するようになったか」という質問について多くの協力者が肯定的な回答をした。一方、「実際に発音をできるようになったか」という質問に対しては否定的な回答も

見られた。具体的な記述は次の通りである。

<肯定的意見>

- ・以前より綴りを見て発音を想像できるようになった
- ・綴りに対して注意するようになった
- ・何とかして読もうとするようになった

<肯定的とは言えない意見>

- ・どのようにした良いのかはなんとなく分かるけど、ルールも覚えていないし実際には難しい。

<その他>

- ・指導に使用された語彙のレベルが高い
- ・指導を受けて読めるようになったことへの達成感
- ・単語を読む際に注意すべき点を細かく教える
- ・なんとなく単語を読むため、覚えることが難しい

6. まとめ

本調査では、英語の不得意な大学生の Decoding の傾向とその指導法を探ることを目的として、調査及び指導の試行を行った。

事前テストから事後アンケートを通して調査協力者の decoding の傾向としては、①ローマ字読み、②既知語活用、③類似語活用の3つがあることが明らかになった。特にローマ字読みを活用しながら読む傾向が顕著に見られ、特に二重母音にその様子が見られた。これは decoding に関する学習経験が少ないか、他の方法知らない可能性がうかがわれた。また、インタビューにより綴り字に対する注意の配分が少なく、安易に既知語と判断して音声化する傾向や、いわゆる音と文字の関係に関する規則 (phonics) の知識もあまりないことがわかった。こうした実態を受けて、phonics に基づく教材を開発し、指導 (試行) を行ない、その効果を検証した。

結果として、認知面ではあまり変化が見られなかった。これは指導にかけた時間が十分ではなかったことや調査協力者の英語の力にばらつきがあることなどの問題が挙げられる。また指導の際に利用した単語のレベルが高かったという意見もあり、より身近な単語を選定し指導に使用する必要があったということも課題である。

能力面で肯定的な影響が見られなかった一方で、情意面では、肯定的な結果が得られた。未知語を見た際に以前より読もうとするようになったということである。本指導に、より頼れる decoding の方法が増えたことで、より未知語に対する意識が「読めない」ではなく、「読めるかもしれない」という肯定的なものに変化したと考えられる。また今回の指導によって、「綴りに対する注意」といった文字認識の基盤に関わる部分に

も良い影響があったのではないかと考えられる。

本調査より、英語の不得意な大学生の一つの課題である Decoding に関して、大学生対象にもリメディアルな活動として長期的な指導の必要性と可能性があることがわかる。「英語が不得意であっても英語を学びたいがうまくできないから諦めている」とう大学生が多く見られる中で、単なる一斉授業をするのではなく、つまずきや苦手箇所を一つずつ調査し、それを解決するための指導・支援をしていくことで、達成感や成功感につながり、情意面・認知面共に肯定的な変化を起す可能性を得られたといえよう。

引用・主要参考文献

- ベネッセ教育総合研究所 (2016) 『中高の英語指導に関する実態調査 2015』 東京：(株) ベネッセホールディングス ベネッセ総合研究所
- Heilman A. W., (1981). 『フォニックス指導の実際』 松香洋子 (訳), 東京：玉川大学出版部
- Kawasaki, M. (2009a). Correlations between phonological processing and comprehension. ARELE, 20, 1-10.
- Kawasaki, M (2009b). Influence of word onset, vowel spelling and Romanized Japanese knowledge on English nonword decoding. 『第35回全国英語教育学会鳥取研究大会発表予稿集』 : 192-193
- 小崎充 (2011) 「英語学習者の視点移動から見たフォニックス指導の効果」 『国士館大学理工学部紀要』 (4), 87-93

Morrison, A. (2009). Overview of Literacy Development. <http://makelearninghappen.com/wpcontent/uploads/5820-Sp14-Lit-Development-and-Disabilities1.pdf>

鈴木寿一, 門田修平 (2012) 『英語音読指導ハンドブック：フォニックスからシャドーイングまで』, 東京：大修館書店

梅木璃子 (2021) 「動機づけプロセスモデルに基づく授業実践」 『大学生英語学習者のつまずきの要因と適切な支援』 in 築道 and 明 (2021) 57-69

卯城祐司, アレン玉井光江, バドラー後藤裕子 (2013) 『リテラシーを育てる英語教育の創造』, 東京：学文社

村上加代子 (2015) 「英語の学習初期における読み書き指導の在り方の検討：基礎的な力としてのデコーディングと音韻意識スキル獲得の必要性について」 『神戸山手短期大学紀要』 第58巻 57-154

辰己明子 (2021) 「英語教育におけるリメディアル学生のつまずきの要因—マインドセットの観点から」 in 築道 and 明 (2021) 29-43

築道 and 明 (2021) 『大学生英語学習者のつまずきの要因と適切な支援』 2018年度 - 2020年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書

※本研究は、2018年度 - 2020年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 『大学生英語学習者のつまずきの要因と適切な支援』 (課題番号 18K00740) (研究者代表 築道 and 明) に基づいた調査である。

**A Survey on Tendency in Decoding Unfamiliar English Words
by Japanese University Students:
A Case of Self-reported Slow Learners of English**

Faculty of Childhood Education, Department of Childhood Education
Noboru KANESHIGE

Hiroshima University
Kazuaki TSUIDO

Nagasaki University of Foreign Studies
Akiko TATSUMI

Wakasa Gakuen
Taiga HAMASAKI

Abstract

his present study is intended to describe the tendency in decoding unfamiliar English words by Japanese university students who have difficulties in decoding and to develop possible instructions to those students who have similar problems. Participants are 21 university students (17 valid) who self-reported that they are “not good at English.” The study follows the following steps: Step1 (Pre-test): Participants are given a list of unfamiliar words and asked to read aloud. Step 2 (Interview): They are asked to why and how they read aloud the words. Step 3 (Instruction): They are given an instruction based on the results of steps 1 and 2. Step 4 (Post-test) and Step 5 (Questionnaire and Interview) are similar to the steps 1 and 2. The pretest shows that participants of this study use mainly three types of decoding strategies when they meet unfamiliar words: (1) Following Romaji rules (2) Using/referring learned words (3) Using/referring similar words. Amongst them, Romaji rules are most frequently used. Based on the results, participants are given a phonics (“letter to sound”) instruction for two weeks. The post-test does not support a positive effect of the instruction on the participants’ decoding strategies, but the follow-up interviews explain a slight change of their attitudes toward decoding unfamiliar words. It is difficult to generalize the results because of the time limitation of this study, but it is still possible to conclude that there needs to be a certain proper instruction necessary to each student based on their own difficulties.

Keywords: decoding, reading aloud, learning difficulties, remedial education

